

時代はスターリンの全体主義体制からフルシチョフの権威主義体制へ。多くの人が権力独裁と鉄の規律の犠牲になった。

イオシフ・スターリン

レーニンは自分の死後の次期党大会で新指導部を選出するよう提起していた。1924年5月のソ連共産党（ボリシェヴィキ、以下「ボ」）第13回党大会において大会代議員たちが、自ら白羽の矢を立てたのが現書記長のスターリン（1878〜1953）だった。

ロシア共産党およびソ連共産党は、他のあらゆる政治集団の解体を通じて権力の独占を獲得していき、次第に、ユーゴスラビア共産党員ミロヴァン・ジラスが後年「新しい階級」と規定した統治体制に転化していった。10月革命をブルジョア民主主義革命と対比して、ジラスは両者の根本的な違いをこう指摘している。

「この新しい階級は、いずれ国であれ、旧来の社会構造に対置すべき新しい経済秩序の発展と確立を成し遂げた後に、革命的な方法をもって権力を確保した。ロシアではすべてがあべこべに起きてしまった。共産主義者は新たな経済秩序を完成させるためではなく、新たな経済システムを形成するために、しかもその過程で社会を統治する権

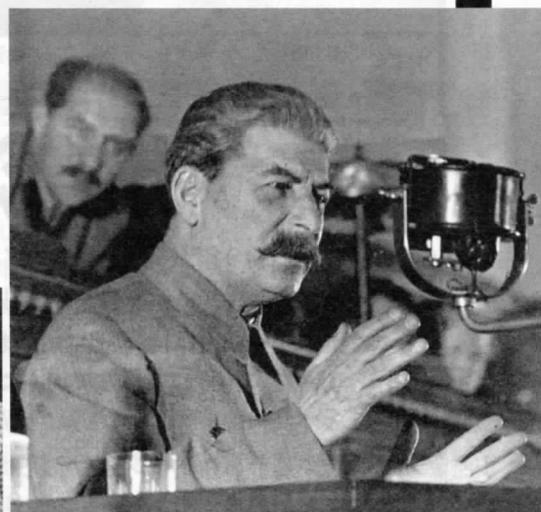
力を打ち立てるために政権を握った。その結果、新しい階級は、共産主義者が政権に就いた後に形成されたのである」(ジラス著『新しい階級』時事通信社、30頁参照)。

こうしたジラスの定式化は、スターリンが始めたソ連の新しい路線を、すなわち「階級としてのクラーク(富農)を絶滅せよ」というテロ・キャンペーンを伴った、工業化および農民の集団化を推進する新しい政策を反映していた。

スターリンは農民との妥協を意味するネットプを止めてしまいい、ネットプマンの資金を没収、彼らの逮捕と流刑が始まった。没収資金は重工業の発展と欧米からの鉱工業設備の輸入に向けられた。これらの政策変更の方向は相互に関連しあっていた。

集団化と富農の撲滅は、農村から、道路や様々な鉱山、工場の建設現場へと頻繁に強制的に割り振られる数百万人の農民の流出をもたらした。囚人の流れは特にウラルやシベリア、極東などの人員確保が至難な地域に向けられた。また、白海、バルト海運河やモスクワ、ヴォルガ運河、ヴォルカタとカラガダの炭鉱、ノリリスクのニツケル

クレムリンで演説するスターリン。(提供/AP・AFLO)



鉱山、コルイマの銅および錫の鉱山、マグニトゴルスクの鉄鉱石採掘場、コムソモリスク・ナムールレの造船所などで多くの五カ年計画事業の現場で「突撃」的建設作業に従事したのが、他にもない彼ら囚人たちだった。強力な軍需工業も創設された。スターリンは、こうした大改造を全て火急の速やかに断行するには、全ソ連邦共産党(ボ)の独裁権力と、鉄の党規律をもつてしても不十分であることを弁えていた。

経済の「指令」管理」体制をつくる際、ソ連における権力の指示系統と構造に大きな偏移が生じた。スターリンは共産党を、「反革命分子」に対する懲罰機関たる内務人民委員部NKVDの支配下に置いた。10月革命に参加した古参党員たちが大部分殲滅された。抑圧による犠牲が数百万人もの人々と労働農車の司令部にまで及んだ。党イデオ

ロイ・メドヴェージェフ(左)

歴史家。主な著書に『歴史の審判に向けて』(現代思潮新社)。

Рой Медведев

ジョレス・メドヴェージェフ(右)

生化学者。主な著書に『ウラルの核惨事』(現代思潮新社)。

Жорес Медведев

注釈
ジラスの「新しい階級」◆ジラス(1911〜95)は独から祖国を解放するバルチザン闘士。44年建国のユーゴスラビア連邦人民共和国でチトー政権副大統領に就任。当初熱烈なスターリニストの彼はユーゴ代表の通訳としてスターリンと議論した体験もあり、ソ連とユーゴ各々の社会主義を検討するうちスターリンの犯罪的病理を自覚していく。彼は英仏型市民革命と比べ、ボリシェヴィキは、旧社会で次代の経済秩序を用意して権力を握った訳でなく、まず権力を握り、新たな特権階級(党官僚)を構築し、集団化と工業化を断行した、と規定する。

クラーク絶滅◆共同体を離れた農民の大多数は中農層を形成、上層にクラーク富農が成長。後者は家族労働が主だが一部は賃労働者を雇用。貧農は分与地を売るか、賃貸に出し、雇われるのを希望。農民層の分解が進み、クラークが商業穀物の担い手に(表1)。当初クラークとは、共同体内の富裕な成員で、他の成員よりも読み書きができる働き手という含意。スターリンは29年彼らを「階級として絶滅する政策」に移行したと宣言。集団化に抵抗、加盟させればコルホーズを牛耳る危険のあるクラーク層を家族ともども貨車で僻遠の目的地に強制移住させた。

(表1)穀物生産・市場向け割合(1909〜13年/全生産比%)

	生産	消費	市場向け割合
中農と貧農	50.0	42.6	7.4
クラーク層	38.0	25.0	13.0
領主層	12.0	6.4	5.6
合計	100.0	74.0	26.0

原典：Nemchinov (1945)
引用：ジョレス(佐々木洋訳)『ソヴェト農業』13頁
※領主層は土地を相当クラーク層に賃貸し売却した。
作成/佐々木洋(2017)

ネットプマン◆ネットプにより農民は食糧税(22年からは一律10%)を払った残余農産物を自由市場で販売するのを認められた。小企業の私的営業の自由も認められ労働者の雇用、商取引が可能となり、ここに生まれた私的商人、私的事業者がネットプマンと呼ばれた。

囚人◆窃盗常習犯など刑事犯以外に、密告やでつち上げて逮捕された夥しい人数の政治犯が動員された(表2)。内務人民委員部NKVDは囚人逮捕の計画を予定通り実行するよう、各支部に訓令した。



ロギーがスターリン個人崇拜によって補強され、彼自身が無制限の権力行使する独裁者になった。こうして大量テロ＝大粛清を基礎としてわが国に全体主義体制が確立されたのである。大粛清の結果として、赤軍の弱体化が39～40年のソ連＝フィンランド戦争で顕在化した。41年6月22日のドイツの奇襲に対して、ソ連には臨戦態勢ができていなかった。しかしながら戦時期に入ると懲罰機関＝内務人民委員部と共産党機構の権威が弱まり、それに代わって軍の規律が社会のあらゆる方面に及んだ。ソ連邦における戦争への国民総動員のレベルはドイツよりも強固だった。国権の最高機関は国防衛委員会だった。スターリンは、最高司令官と人民委員会議議長として全権を掌握した。ドイツに対する戦争と日本に対する戦争の勝利は05～18年



1954年のシベリアの収容所と下は1965年のフルシチョフ。(提供/AP-AFLO)

(日露戦争と第一次世界大戦期)に失った多くのロシア(帝政ロシア)の領土を取り返した。戦後、スターリンは元帥と將軍たち(ジューコフ將軍など)を権力から押し付け、再び懲罰機関を前面に押し出した。ラーゲリ(矯正労働収容所)の強制労働キャンプが拡大した。戦後復興期に、建設労働が主だったが、数百万のドイツ兵捕虜と日本兵捕虜を徴用する収容所が設立された。戦後ドイツから帰還した、ソ連兵捕虜と戦時中ナチ収容所に連行されていたソ連市民の「東方労働者」も収容所に、ことに「原子力収容所Atomic GULAG」の建設現場に送られた。予想外に早く49年に原子爆弾を製造した最初の原子炉もこれらの囚人たちが建設したものだ。

ある面で大規模弾圧には過酷な民族的弾圧および宗教的弾圧という特性もある。スターリン晩年のソ連で2番目に影響力があった人物は懲罰機関＝内務人民委員部の議長、ラヴレンチー・ベリヤだった(懲罰機関の長であるとともに原子力開発も所管していた)。党の特権階層ノメンクラトゥーラを買収するために、まず手始めに各地域の党委員会書記たちに、本給とは別に第二の高額な秘密の給与制度「スターリンの封筒」が導入された。

ニキータ・フルシチョフ
スターリン死後、ソ連共産党中央委員会書記の地位に就き、元帥や將軍たちに支持されたフルシチョフ(1894～1971)が新たなクーデターを起こした。ベリヤと彼の側近たちが逮捕され、非公開の裁判後に銃殺された。わが国の権力が党のノメンクラトゥーラの手に戻った。スターリンの主な盟友だったモロトフやヴォロシロフ、ミコヤン、マレンコフ、カガノーヴィチは左遷された。1956年2月のソ連共産党第20回大会におけるフルシチョフの歴史的演説「個人崇拜とそ

10月革命はロシア

「異論派」兄弟が見たレーニンからプーチンまで

翻訳＋注釈 — 佐々木 洋 主な訳書に『ソヴェト農業』(北大図書刊行会)

第 2 回

アの人々に幸福をもたらさなかった

1930年 (集団化が本格化)	17.9
1935年	96.6
1940年	166.0
1945年	146.1
1950年	256.1
1953年 (スターリンの死亡年)	246.9

引用：アブルボーム『グラーグ』白水社638頁

懲罰機関◆後の国家保安委員会KGBとなる内務人民委員部NKVDは34年に秘密警察と強制収容所を統合した懲罰機関であり、「反革命分子」とみなす人物の逮捕、尋問、処刑やスパイ摘発などを行っていた。

大粛清◆反革命罪だけで37～38年までに68万余が死刑、63万余を監獄に送った。スターリンは自分の同時代史を知る活動家を抹殺。代わりに事情を知らない若い世代を抜擢。上意下達の独裁体制を確立した。

原子力収容所◆原子炉や再処理工場、核廃棄物貯蔵所を建設した囚人と工兵は、ソ連軍が連行したドイツ兵捕虜と、ナチ収容所で鉱山・建設労働を経験したソ連人帰還兵が主体。ジョレスはいう。「収容所は、機動性に富み、本質的には奴隷労働であるが、熟練労働のユニークな供給源であった」と。

民族的弾圧◆チエチエン人やヴォルガドイツ人、極東の朝鮮人を対独/対日協力を口実に強制移住させた。

宗教的弾圧◆21～22年飢饉の被災者救済を口実に教会財産を没収、司祭や修道僧を追放・収監した。ネップ期に宗教的礼拝が復活したが、教会は集団化に反対する農民を支持するものと想定し、再度非法化した。

クーデター◆スターリン死後、経済的には非合理と見て囚人の釈放(釈放第1号がモロトフの妻)、収容所体制の解体に着手した。経済的には「リベラル」で「改革派」のベリヤによる権力継承を阻む政変。

全体主義と権威主義◆党とイデオロギーを最優先、公私の全生活を規制する全体主義の体制から、一党独裁体制が、政治力の動員よりも、民衆が私生活に埋没する状況に依存する権威主義の体制に移行したとみる。



アフガンの町をパトロールするソ連軍。(提供/AP・AFLO)

だった。労働者と農民、大衆向け職業従事者の生活水準は低いままだった。

ソ連の体制批判者たちを抑圧する方策のなかで、国外追放と精神医学的「鑑定」を現に実行しはじめた。

西側との「冷戦」が「デタント」に代わったにもかかわらず、中国との緊張が高まった。ブレジネフ指導部の最悪の過ちはソ連軍のアフガン侵攻だった。合衆国と英国はこの過ちを大規模に繰り返して、いまなおこの地に駐留し続けている。

ソ連の軍事機構と原水爆の武器庫およびその運搬手段がNATOとほぼ均衡に達した。

.....
.....
.....きょう 札幌学院大学を夏期教授。

「異論派」兄弟が見たレーニンからプーチンまで

10月革命はロシアの人々に幸福をもたらさなかった

フルシチョフの更迭◆集団指導制を無視する権力集中(第1書記と首相の兼任)やMTS(機械・トラクターステーション)廃止の大失敗、絶え間ない組織の再編成から不興を買い孤立して。更迭と前後してスターリン後継を求め勢力が台頭する一方、メドヴェージェフ兄弟のような社会の民主的改革を提起する異論派運動が生まれた。

コルホーズ◆集団農場◆理念は大規模社会主義農業として農民が自発的に結合する農業生産協同組合。現実には、強制的集団化の結果、農民の精神や伝統が断絶、耕作する農場労働者が官僚主義的に統制された。農村の人口減は現代の普遍的現象だが、欧米日では勤勉で進取の精神をもつ農民が生き残り、耕した。ソ連の集団化では各戸の農具や家畜まで「社会化」し、個性を否定、自由や起業心を警戒、雁字搦めの規則を押し付けた結果、大地を愛する農民らしい心理や伝統が絶たれてしまった、とジョレスは指摘する。

精神鑑定◆ジョレスが自主出版の『生物学と個人崇拜』を69年海外出版すると、報復に同年、勤務先の放射線医学研究所を解雇、70年精神病院に拘禁。この暴挙にジョレス釈放運動が広まり、世界で報道された。

中国との緊張◆中国は文化大革命期の66年、ソ連を「社会帝国主義」と批判、68年にはチェコに軍事介入したソ連を周恩来が非難した。69年3月にはアムール川支流のウスリー川ダムンスキー島(珍宝島)で中ソ国境紛争が勃発。70年代、80年代前半に、中ソ国境地帯に双方100万の軍隊を配備、対立を続けた。この間、中国は水面下で中米接近をはかり、71年キッシンジャーと72年ニクソンの訪中、78年には米中国交回復を実現した。

アフガン侵攻◆79年暮、ブレジネフが社会主義を唱える親ソ政権を支援し、ソ連軍がアフガニスタンに侵攻。だが、イスラム原理主義系ゲリラの激しい抵抗でソ連の作戦は泥沼化、完全に失敗し10年後の89年ようやく撤退。ソ連兵死者1万5000人、負傷4万以上というが正確には不明。ゲリラ側死者は60万人以上と推定される。

軍事力のバリエーション◆72年5月締結の第1次米ソ戦略兵器削減条約(暫定協定)は、ICBM(大陸間弾道ミサイル)とSLBM(潜水艦発射弾道ミサイル)の発射台を凍結(現状維持)で合意。79年6月署名の第2次削減条約では、ICBMの上限を米ソ均衡の2400発(ほぼ現状維持)にすることで合意したが、ソ連のアフガン侵攻で米国会が批准拒否、第2次削減条約は発効しなかった。

の結果」は、スターリンの懲罰的独裁の権威を失墜させ、受刑者数百万人の名誉回復と権力構造の変革を保証した。全体主義体制が権威主義体制に代わった。国家保安省MGB(内務人民委員部NKVDの後継機関)の小型版、国家保安委員会KGBをソ連共産党中央委員会幹部会(旧政治局)の管轄下に置いた。党とソヴェエトの特権層ノメンクラトゥーラが統治する階級としての、そしてあらゆるレベルの国家官吏および党委員会の決定に従う企業管理職としての特性を取り戻した。党が「指令」組織に、ソヴェエトが「執行」組織になった。「スターリンの封筒」は不法だとして廃止された。しかし、「新しい階級」の高い生活水準は、給料引き上げのほか、多数の特典(広い住居や国営の別荘、運転手つき乗用車、特別の登録配給所、特設病院、特設の保養施設など)によっても提供されていた。

軍用宇宙産業を軸とする工業は東西「冷戦」の対立による刺激を受け、引き続き発展した。だが農業は慢性的な危機の時代に陥り、都市への食糧供給は輸入依存(加・米・豪・西独などから輸入)が深まった。

レオニード・ブレジネフ

1964年10月の中央委員会総会でフルシチョフはすべての

地位から更迭され、ソ連の権力構造は再度変わった。国を統治する新体制は今回「集団指導制」と呼ばれ、党務に就いたブレジネフ(1907〜82)書記長とアレクセイ・コスイギン首相が権力を分掌した。コスイギンは政府部内で、企業の独立採算を強め、利潤概念をとりいれる独自の経済改革構想を提示した。イデオロギー方面では、フルシチョフ時代の改革派に代わり、スターリン時代以来の教条主義的哲学者のミハイル・スースロフが思想と全メディアを仕切った。ブレジネフは防衛産業と軍事問題、国際問題に集中した。

石油と天然ガスが主要輸出品のソ連にとり、国際価格の有利な状況が莫大な外貨収入を齎し、これが食糧および消費財の大幅な輸入激増を可能とした。都市住民の生活向上が観察された。ところがコルホーズ体制は一段と衰退する状況にあった。このことがソ連の全ての市民に

対し、統一したパスポート(身分証明書)を交付することにより、労働者と農民の権利を平等にするという新憲法77年憲法の制定に導いた。

特権的市民の「新しい階級」が顕著に拡大した。この範疇には今や党機関の職員のみか、高位の政府勤務員、軍の将官、企業の所長らも属していたが、彼らは共産党員たることが不可欠